

少年小説で不滅の名を残した 佐藤紅緑 さとうこうろく

少年小説を書いて、日本中の少年たちから「紅緑先生」と親しまれ、尊敬された佐藤紅緑は、まれに見る多彩な才能の持ち主であった。

佐藤紅緑は最初、新聞記者として立ち、俳句の世界にはいつて名をなし、次いで脚本作者となり、劇団を結成して演劇活動に移り、純文学を執筆し、新聞小説をもって有名となり、さらに少年小説を書いて不滅の名を残したのである。

佐藤紅緑は本名治六こうろくといい、一八七四年（明治七）七月六日、当時青森県第三大区第一小区（弘前）親方町二十八番地に、父弥六、母しな、の次男として生まれたが、一家はほどなく元大工町三十三番地に引越したので、紅緑は元大工町において成長した。

佐藤家は代々津軽藩の山鹿流の軍師の家といわれているが、佐藤家の言い伝えによると、何代か前までは百姓であったという。ところが、ある夜おそく堀ばたを通りかかった時、堀を泳いで城中に忍び込もうとした怪しい人影を発見して、それを訴え出た功績を認められ、士分にとり立てられたといわれている。もともと佐藤家は、士分といってもわずか三十俵二人扶持ぶちという軽輩にすぎなかった。

佐藤紅緑を語るには、まずその父弥六やろくを語らねばならない。この父と子は、その性質行動がほとんど同じだからである。佐藤弥六は、幕

末から明治、大正にかけて、弘前地方の代表的文化人であり、啓蒙的指導者として、人びとに尊敬された。弥六は最初、藩校稽古館けいこかんに学んだが、選抜されて海軍術修業のために江戸にのぼり、弘前に帰ってから稽古館けいこかんに併設されている蘭学堂らんがくどうで蘭学を学んだ。二十四歳の時、弥六は蘭書らんしよ（オランダ語の本）でナポレオン戦史を講義したが、これは津軽藩における西洋史講義の最初であった。のち、ふたたび上京して福沢諭吉の慶応義塾で英語を学び、もともと古い門下生の一人として、福沢に愛された。しかし勉学中に、家に残った兄が死亡したため、一家をみるために弘前に帰って、亡き兄の妻などと結婚した。苦しい生活の中から勉学の費用を出してくれた亡き兄の恩義にむくいるためと、母へ孝養をつくしたいという心が、弥六をして、中央での学問生活を投げすてさせたのである。

弘前へ帰った弥六は、亡兄の残された子、清明せいめいと操和そわを自分の子供とし、士族の籍をおりて商人となり、親方町とうぶつに唐物屋（和洋雑貨店）を開いた。弘前地方にランプや漢訳かんやくの聖書せいしよを売ったのは、弥六が最初だという。そのかたわら彼は英学と自由平民主義じゆうへいみんを教えたり、あるいは郷土史を執筆したりした。

自由平民主義をとなえ、一介いっかいの商人となった弥六ではあったが、その武士気質はなかなか抜けなかった。店先であれこれと商品を選ぶ客があると「お前ばかり選ぶと、あとの客が困る。選ばずにさっさと買ったらいいだろう。」などと平気で客をしかりつけたという。

弥六は頑固一徹がんこいつてつ、名利に恬淡てんたんとして正義感が強かった。彼は当時の士族の生活難打開を真剣に考え、弘前地方に養蚕ようさんを導入し、ブドウや

リンゴの栽培を率先して実行し、生計の途を失って困窮していた士族たちの生活安定のため、先駆的役割を果たした。

一八八八年（明治二十一年）、弥六は推されて青森県会議員に選ばれたが、この間に福沢諭吉を通じてオランダ公使推薦の打診を受けたりした。しかし彼は老母に孝養をつくさねばならないとそれを固辞したのである。これらの事実からみても、佐藤弥六は一地方の市井人として、ケタちがいのスケールを持った傑出した人物だったことがわかる。県会議員をやめてからの弥六は、いつさいの公職に就くこともなく、不遇で貧乏のまま、一九二三年（大正十二年）にその生涯をとじるが、その間に『林檎図解』『津軽のしるべ』『陸奥評林』等の著書があった。

佐藤紅緑には異父兄清明・異父姉操和、兄密蔵、妹操美があった。母しなは操美が生まれて間もなく死去したので、紅緑は生みの母の愛にひたることがなかった。父の弥六は後添いの妻たみをもらったが、幼時の紅緑のめんどうをみてくれたのは、祖母と異父姉の操和であった。操和は紅緑より七歳年長ではあったが、母のような愛情で紅緑の世話を続けたという。

紅緑の少年小説『少年讃歌』（昭和四）の始めに、主人公浅岡亨二が冬の寒い朝、自分はあたたかい寢床にぬくまあって、姉が台所で味噌汁のみをきざんでいる音を聞きながら、母がわりに自分のめんどうをみてくれる姉に対して、しみじみと感謝をささげる場面が、清冽な筆致で書かれている。『少年讃歌』は弘前を舞台にくり広げられる小説だけに、おそらく紅緑は、姉操和に対する自分の心を、そのまま主人公の浅

岡亭二に託したものと考えられ、強い感動を受ける。いったいに、紅緑の少年小説には、自分の体験をそのまま織り込んだものが多い。それだけに迫力があって、読者の少年たちを感動させた。ことに少年読者は感覚が鋭く、ホンモノをとらえるのに敏感である。紅緑の少年小説は、自分の体験をいつわらないで書くため、少年読者はそこに人生のホンモノをみとめて、熱狂したのである。

おさない頃の紅緑は、しまつにおえない駄々子だったが、わる気がないのでかわいがられたという。彼は一八七九年（明治十二）九月、弘前朝陽小学校に入学した。当時の小学校は、小学初等科三年。中等科三年の六年間の就学だったが、紅緑は十九年七月小学中等科を卒業している。

小学校を卒業した紅緑は、東奥義塾に進学するが、この頃から自由奔放な行動が目立ってくる。彼はいつさいの束縛をきらい、つねに教師と衝突して、ついに東奥義塾を退校する。こんどは一八八九年（明治二十二）五月に、青森から弘前に移転した青森尋常中学校（現県立弘前高校の前身）に入学する。中学校入学の頃から、紅緑の文学的才能はようやく開花し始める。紅緑は「覚眠社」を結成して、雑誌『覚眠』を発行する。

しかし中学時代の紅緑は、文学的活動よりも乱暴者として有名であった。手あたり次第いたずらはする。喧嘩はする。町内の人びとは、父の弥六に対しては、どんな時でも「弥六様」と尊称をつけて敬意を払ったが、息子の紅緑のことになると「洽六」とか「弥六のセガレ」

と、にくにくし気によびすてにしたという。とにかく紅緑の行くところ、乱暴、いたずらの被害が続出するというありさまであった。

さきにも引用した『少年讃歌』に、主人公浅岡享二の親友に梶原十介という少年が出てくるが、十介はそれこそ手のつけられない乱暴者で、中学生のくせに酒は飲む、いのちがけの喧嘩はする、大円寺の五重塔によじのぼって、てっぺんから小便をする、同級生の弁当をぬすんで食べる、学校の用務員をいじめる、ありとあらゆる乱暴をするが、これは紅緑の中学時代の行動が、そのまま小説の中に持ち込まれたものである。ただ十介の乱暴は、乱暴するための乱暴ではなく、彼には彼なりの正義や理想があるのに、それが周囲から理解されないさびしさから、どうにもならず乱暴を働くのである。おそらく中学時代の紅緑も、十介と同じ心境だったことは、容易に想像できるのである。

このような紅緑の行動に対して、父の弥六はいつさい放任していた。せいぜい「バカモン！」と一喝するくらいだったらしい。紅緑はこのような不良少年の生活の中で、弘前中学校校友会誌『校友』に、しきりと和歌や美文を発表する。三年生の頃からである。創刊第一号に第二部生総代佐藤紅緑の名で「祝辞」を書き、北柳山人、北柳生、北柳氏の号で和歌を発表したのを最初に、二号をのぞき六号まで毎号に執筆している。

一八九三年（明治二十六）四月、弘前中学校を四年で退学した紅緑は上京した。親の許可を受けない家出<sup>いえて</sup>である。東京には兄密蔵がいて、

慶応義塾に学んでいた。紅緑は密蔵をたよって上京したが、密蔵も苦学して他人に居候いそうろうをしている身だったので、紅緑の身柄を引き受けるわけにいかず、結局、同じ弘前出身の先輩陸羯南くがかつなんに引き受けてもらうことになった。

陸羯南は中田実なかだみのるといい弘前士族、一八五七年（安政四）十月十四日生まれ、一八八〇年（明治十三）に絶家くがした陸家を再興して、その戸主となった。羯南は号である。一八八一年（明治十四）太政官文書局の官吏となったが、一八八八年（明治二十一）辞職して東京電報の社長となり、翌年、新聞『日本』を創刊、その社長となってジャーナリズムに君臨した。羯南の言論の激しさに、政府はしばしば新聞発行禁止の弾圧をくわえたが、羯南は節を屈したことがなかった。反骨精神旺盛で愛国者の羯南と、熱血漢の紅緑との出会いは、紅緑の思想や生き方に大きな影響を与えずにはおかなかった。ことに紅緑は中学校の時から新聞『日本』を愛読して「威武いぶも屈あする能あたわず、富貴いんも淫いんする能あたわずとは日本新聞のことなり」と、羯南の不屈の闘志に感動していたのである。それだけに羯南の一挙手一投足に、深く影響されたのである。紅緑は羯南のおかげで、上京後一年もたたないうちに、生涯を決める三つの大問題にふれたという。その一つは物を書いて生活するということ。次は文学という道にはいったこと。最後の一つは日本という国について、愛国的に、あるいは社会的に力をそそぐという魂をはっきりつかんだことだという。

紅緑は、羯南の指導によって、これまでのばらばらだったものの考え方を整理され、その進むべき道をつかんだのである。紅緑は死ぬま

で羯南を「先生」と尊び、羯南の名を口にするたびに涙を流したという。これをもってしても、紅緑がどんなに羯南に傾倒し、尊敬していたかがわかるのである。

羯南もまた紅緑に対して、きびしい態度でしかりつけ、あるいは愛をもって精神面を吹き込んだ。紅緑は朝暗いうちに起きることを命ぜられていたが、少しでも横着おうちやくをきめこんでいると大声でどなられるので、羯南の最初の一声を聞くと、半分眠ったままであわてて起きあがり、雨戸をあけて庭にとび出し、そこにいる犬をけとばして眠気をはらったという。

紅緑は一九三〇年（昭和五）『陸羯南先生、銘肝めいかん私記しき』という文章で「……私は先生の訓戒を忘れない。『文学者になるのもよいが、日本には大きな事が眼前に迫って居る。国家経倫けいりんのことが……』私は小説を書いて先生の所謂いわゆる売文の徒になって居る。だが私は『道』のための小説以外は書いたこともなければ、これからも書こうとしない。これは先生が私に給わった靈魂だからである」と書いているが、恩師から靈魂を給わった紅緑は、幸福だったといわねばならない。それほどまでに尊敬できる師にめぐり会えることは、この世で珍しいことだからである。

上京直後の紅緑は、羯南の玄関番をしながら、はじめ法学院で法律を勉強したが喧嘩をしてすぐ退学、こんどは国学院にはいったが、こ

れも三ヶ月ほどで退学する。自由奔放な紅緑の性格は、規則で縛る学校になじむことができなかった。

その頃のある日、秋の早い夕方のこと、書生部屋に灯をつけようとするやうとすると玄関で人声がした。出てみると薄暗がり立っている人影があった。肩が四角で顔の平たい男である。男は玄関番の紅緑の許可も受けずに、ずかずかと奥へ通ろうとするので、紅緑は津軽弁丸出しで「どなたでし？」と聞くと「正岡です」という答が返った。これが正岡子規と紅緑の最初の出会いであった。子規との出会いは、紅緑を俳人としての才能を開かせる。

紅緑は羯南のすすめで、一八九四年（明治二十七）に日本新聞社に入社した。社主兼社長が陸羯南。正岡子規が主幹格、紅緑とこれも俳人の石井露月が平社員だった。ほかに社友として福本日南、末永鉄巖、鳥居素川、古島一雄、国分青崖、池田三山など明治期を代表する論客、文化人が揃っていた。

新聞『日本』で同じ部屋にいたので、紅緑は露月とともに子規から俳句を学ぶようになった。同年九月十九日のことである。子規からもらった題は「薄」<sup>すすき</sup>で、紅緑が四十句ほど作って見せると、そのうちの二句が子規にほめられた。

<sup>すすきの</sup>芒野や月出でんとして風が吹く

絶壁の一本芒乱れけり



こうして、紅緑は俳人の道を歩むのであるが、あるとき子規に「なんでも俳句は雄大なのがよい。」といわれ、紅緑はすぐに「隣村の案山子もてくる野分のわけかな」とやったら、それではあんまりだと子規に笑われたという。紅緑の小説には、思わず吹き出さずにおれないユーモアがあるが、これは紅緑のもって生まれた資質であろう。子規もそれを見抜いて「紅緑又多少の滑稽思想こっけいを有す」といつている。

紅緑という雅号がごうも子規がつけてくれた。初め紅緑は、本名の洽六の洽を二つに割って、合水とつけようとしたら、子規は一合の水では小さい。本名を音訳して「紅緑」がよかろうといったので、それから「紅緑」を使用したのである。

一八九五年（明治二十八）夏、紅緑は病気になって弘前に帰り、東奥日報に入社したが、翌年に仙台の東北日報社に入社、その後十年間というもの各地の新聞社を移り歩いた。一九〇六年（明治三十九）東京に帰って、脚本『俠艶録』を書いて爆発的な人気を得て、しばらく芝居の脚本執筆を続けた。

大正にはいつてからは新聞小説を書いて日本きつての流行作家になった。紅緑の書いた新聞小説は、ことごとく読者を熱狂させ、小説ぎらいの人でも紅緑の小説なら読むというほどであった。それも紅緑がいう『道』のために書くという精神が、どの小説にもこもっていたからである。一九二二年（大正十）に紅緑が毎夕新聞に連載した『大盗伝』は、読者の大喝采を博し、毎夕新聞は発行部数十六万から三十二万部に増え、連載が終ったら三万の読者を失ったといわれている。これをもって、紅緑小説がどんなに人気があったかがわかるであろう。

紅緑は一九二七年（昭和二）、最初の少年小説『あゝ玉杯に花うけて』を雑誌『少年倶楽部』<sup>クラブ</sup>に発表した。少年倶楽部編集長加藤謙一のねがいにこたえて書いたのである。

加藤謙一は弘前市松森町の出身、三省小学校や富田小学校（昭和四年二大校に合併）の先生をしていたが、少年雑誌を作ることを、一生の仕事にしようと上京、講談社に入社した。たまたま加藤のガリ版を見た講談社の野間社長は、そのきれいなにおどろいて、入社一ヶ月半の加藤を少年倶楽部編集長にしたという。加藤は紅緑に少年小説を書いてもらうことを思いたち、紅緑に面会して「少年倶楽部に小説を書いていただきたいのですが。」と切り出したら、それまで機嫌よく話していた紅緑が「なにッ、このおれにハナ垂れツ子の読む小説を書けというのか。」とどなったという。しかし加藤は「先生に子どもの小説をお願いすることが、そんなに失礼なことでしょうか。」と反問した。「ハナ垂れツ子と先生はおっしゃるが、子どもは国の宝物ですぞ。子どもがよくならなければ日本の国はよくならない。その子どもによい読み物を与えようと思って、いろいろな作家にあたってみたが、大人のために恋愛小説を書く文士ばかりで、子どものために一肌ぬぐうという人は一人もいません。先生ならきつと子どものために真剣になってくれると思いきんでお願いに来たのですが。」と加藤がいうと、紅緑は「よし、考えておこう。」といったという。

この加藤の一言が動機となって、『あゝ玉杯に花うけて』が生まれ、少年小説作家としての佐藤紅緑が新たに誕生することになる。昭和二

年二月号の少年倶楽部に『あゝ玉杯に花うけて』が発表されると、少年読者は文字通り熱狂した。それまで三十万部の売れゆきだった少年倶楽部は、紅緑の少年小説が掲載されたとたん、四十五万部にふくれあがったというから、いかに読者に感動を与えたかがわかるであろう。

とにかく紅緑の少年小説は、これまでの少年のための童話や読み物と、全く違っていた。それは文字通り小説だった。ひたすら大人おとなになるうとねがっていた少年たちは、読者が子どもだからと、意識することがなく書きすすめる紅緑の小説を、圧倒的に支持した。事実、紅緑の少年小説は読者の子どもたちを子ども扱いにできなかった。子どもを一個の人格として扱っていた。それが子どもたちを感動させたのである。『あゝ玉杯……』に登場する青木千三、安場五郎、柳光一は少年読者の隣人であり、友人であった。男らしい物語の中に、正義があり情熱があり、ユーモアがあり、友情があり、努力があり、それが波瀾はらんぱんしょう万丈の物語の中に躍動していた。

紅緑は昭和四年三月号の少年倶楽部に『私の小説について』と題して「……私は少年少女が大好きです。心の底から諸君を愛します。私のこの愛！ 私の燃ゆるが如き情熱は何とかして諸君を喜ばせ、諸君に善い言葉を聞かせ、善い行いを督励するよう奮励させ、そして諸君を立派な人物にしたいという希望を起こさせます。この希望のある以上は私の材料は尽きません。私の愛のある限り私の小説は続くでしょう」と書いている。紅緑の小説は確かに彼が少年たちにいただいた愛情から生まれたものであり、紅緑自身がいう「私は『道』のための小説以外に書いた事もなければこれからも書こうともしない」ことの実践であった。

紅緑の娘で、やはり小説家の佐藤愛子は「少年倶楽部の編集部から送られてくる愛読者の手紙を読んで、父（紅緑）いつも笑いながら涙を流していた。『子どもというのはいいもんだなあ、はっはっはっ。』その声は今でも私の耳に残っている。父は本当によく笑い、泣き、怒る人だった。少年小説を書くのにうってつけの人だった。七十六年の父の生涯で、少年小説を書いていた五十歳台の頃が一番倅しあわせだったにちがいないと私は思っている」と書いているが、少年読者の手紙に笑い、涙を流す紅緑の純粋さの中に、彼の少年小説が、少年たちの魂をゆり動かした秘密があったと思う。

紅緑の少年小説は『あゝ玉杯…』のあと『紅顔美談』『少年讃歌』『一直線』『少年聯盟』『犬塚信乃』『英雄行進曲』『黒將軍快々譚』『街の太陽』『満潮』と十五年間にわたって執筆された。

佐藤愛子は『花はくれない』という小説で、父紅緑の一生を書いた。『花はくれない』は小説と銘めいをうっているが、おそらく真実を書いたにちがいない。その中に次のような一節がある。

それは年の暮れ近い、晴れ上がったあたたかい昼前だった。彼が本郷通りを散歩していると、くたびれた兵隊服を着た一人の青年が近づいて来ていった。

「失礼ですが、佐藤紅緑先生ではありませんか。」

「そうです。」彼が答えると垢<sup>あか</sup>じんだ顔の中で、青年の目は子供のように輝いた。

「ぼくは先生の愛読者でした。『あゝ玉杯に花うけて』や『英雄行進曲』など、五へんも六ぺんもくり返し読みました。辛いことがあるたびにあれを思い出して発奮しました。ぼく、一生に一度は先生にお会いしてお礼をいいたいと思っていましたのです。」

冬の日射しの中に立ち去って行く青年の後姿を、彼はいつまでも見送っていた。彼の年老いた小さな目から、一筋の涙が流れて頬を伝わった。遠い歳月の彼方から、かつてのあの誇りと力が彼の体内に蘇<sup>よみがえ</sup>ってくるのを彼は感じた。それはおそらく、彼に訪れた最後の、そして最も輝かしい栄光の一瞬であったにちがいない。

「さようなら、頑張ってくれたまえ。」

彼は青年の後姿に向かっていった。その声は青年には聞こえなかった。彼はもう一度呼びかけた。

「頑張ってくれたまえ——。」

そうして彼は頬に涙を伝わらせたまま、短く声を上げて笑った。——

右の出来事は戦後昭和二十一年（一九四六年）のことであった。紅緑の少年小説の真髓が、右の文章に凝固ぎょうこされて、まさに感動的である。気骨をもって欲するままに生きた紅緑は一九四九年（昭和二十四）六月二十四日、老衰のため死去した。しかし彼の少年小説は、今もなお読みつがれている。

**参考文献**

佐藤愛子『花はくれない―小説佐藤紅緑―』一九六七年（昭和四十二）講談社  
千葉寿夫『佐藤紅緑』「郷土の先人を語る(3)」一九六九年（昭和四十四）弘前市立図書館

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、二〇二・二二五頁